

大進生昌が家に、宮の出でさせたまふに、東の門は四足になして、それより御輿は入らせたまふ。北の門より女房の車どもも、まだ陣のあねば入りなむと思ひて、頭つきわるき人も、いたうもつくるはず、寄せて下るべきものと思ひあなづりたるに、檳榔毛の車などは、門小さければ、さはりてえ入らねば、例の筵道敷きて下るるに、いとにくく、腹立たしけれども、いかがはせむ。殿上人、地下なるも、陣に立ち添ひて見るも、いとねたし。

御前に参りて、ありつるやう啓すれば、「ここにも、人は見るまじうやは。なかはさしもうちとける。」と笑はせたまふ。「されど、それは目なれにてはべれば、よくしたててはべらむにしもこそ、おどろく人もはべらめ。さても、かばかりの家に、車入らぬ門やはある。見えば笑はむ。」など言ふほどにしも、

「これ参らせたまへ。」とて、御硯などさし入る。「いで、いとわろくこそおはしけれ。など、その門はた狭くは造りて住みたまひける。」と言へば、笑ひて、「家のほど、身のほどに合はせてはべるなり。」といらふ。「されど、門の限りを高く造る人もありけるは。」と言へば、「あな、おそろし。」とおどろきて、「それは于定国がことにこそはべるなれ。古き進士などにはべらずは、承り知るべきにもはべらざりけり。たま

たまこの道にまかり入りにければ、かうだにわきまへ知られはべる。」と言ふ。「その御道もかしこからざめり。筵道敷きたれど、みな落ち入り騒ぎつるは。」と言へば、「雨の降りはべりつれば、さもはべりつらむ。よしよし、また仰せられかくることもぞはべる。まかり立ちなむ。」とて、往ぬ。「何事ぞ、生昌がしみじうおぢつる。」と問はせたまふ。「あらず。車の入りはべらざりつること言ひはべりつる。」と申して下りたり。

同じ局に住む若き人々などして、よろづのことも知らず、ねぶたければ、みな寝ぬ。東の対の西の廂、北かけてあるに、北の障子に懸金もなかりけるを、それも尋ねず。家主なれば、案内知りてあけてけり。あやしくかればみ騒ぎたる声にて、「なぶらはむはいかに、なぶらはむはいかに。」と、あまたたび言ふ声にぞおどろきて、見れば、几帳の後ろに立てたる灯台の光はあらはなり。障子を五寸ばかりあけて言ふなりけり。いみじうをかし。さらにかやうのすきずきしきわざ、夢にせぬものを、わが家におはしましたりとて、むげに心にまかするなめりと思ふも、いとをかし。

かたはらなる人をおし起こして、「かれ見たまへ。かかる見えぬものあめるは。」と言へば、頭もたげて見やりて、いみじう笑ふ。「あれは誰ぞ。頭証に。」と言へば、「あらず。家の主と、定め申すべきこと

はべるなり。「と言へば、「門のことをこそ聞こえつれ、障子あけたまへとやは聞こえつる。」と言へば、「なほそのことも申さむ。そこにさぶらはむはいかに、そこにさぶらはむはいかに。」と言へば、「いと見苦しきこと。さらにえおはせじ。」とて笑ふめれば、「若き人おはしけり。」とて、引き立てて往ぬる、後に笑ふこといみじう。あけむとならば、ただ入りねかし。消息を言はむに、「よかなり。」とは誰か言はむ、と、げにぞをかしき。

つとめて、御前に参りて啓すれば、「さることも聞こえざりつるものを。昨夜のことにめでて行きたりけるなり。あはれ、かれをはしたなう言ひけむこそ、いとほしけれ。」とて笑はせたまふ。

姫宮の御方の童べの装束つかうまつるべきよし仰せらるるに、「この袖の上襲は何の色にかつかうまつらすべき。」と申すを、また笑ふもことわりなり。「姫宮の御前の物は、例のやうにては、にくげにさぶらはむ。ちうせい折敷に、ちうせい高坏などこそよくはべらめ。」と申すを、「さてこそは、上襲着たらむ童も参りよからめ。」と言ふを、なほ、「例の人のやうに、これかくな言ひ笑ひそ。いと謹厚なるものを。」と、いとほしがらせたまふもをかし。